（１）作文教育研究会

会　長　上田　浩稔（中村南小学校）
事務局　大西　由香（東中筋小学校）

１．研究主題

「書く意欲を高める指導」

２．研究経過

月　　日	活　動　内　容	場　所
８月１９日（水）	夏期研修会 講師による講話 講師：濱松　美枝先生 演題：「作文をどう書かせるか」 実践発表・交流 「作文教育と学級経営」 上田　浩稔（中村南小学校） 「児童詩の見方、書かせ方」 大西　由香（東中筋小学校）	中村南小学校
１月２０日（月）	学習会 ・「四万十川の子」校正作業 ・学習「児童・生徒の作品をもとにした『詩』の読み方、書かせ方の指導について」 ・本年度の活動の反省	中村南小学校

３．今年度の取り組みより

1　夏季研修会

１、講話　演題「作文をどう書かせるか」　　濱松　美枝先生（OB）

（１）書けない原因として考えられること

①相手・・・読み手が不明確で、書いても反応がない。
②内容・・・適切な題材が見つからない。何を書いたらいいかわからない。
③語彙・・・様子や心情を表す言葉が見つからない。つながりのある文章にならない。
④書くのに時間がかかる・・・書きなれていない。

（２）書く意欲が高まるとき

・ゴールイメージが明確であること、
・相手意識や、目的意識等、明確な場面設定が必要であること。
・書いたことの評価（価値づけ）を共有していく。
・書けた喜びにつなげる（自信・繰り返し書く）
・書くことに慣れる（書くことの習慣・書きたいことを見つける感性）
・書いた内容から思いを受け止める（学級経営・心の成長に気付く）
・語彙・表現方法など系統性を踏まえた知識及び技能（語彙を増やす工夫・目的に応じて必要な内容を整理し、書き表し方を工夫する力）

２、研究協議

・何のために書くのかの場面設定が重要。そのためにゴールイメージである言語活動の工夫が必要になる。どのように工夫されているか。
→題材を見つけるアンテナを常にはっていること。名人紹介の単元では、条件を作り、それを達成できたらマンションに入ることができるという場面を考えた。

→要旨をまとめて伝える活動で、校長先生に聞いてもらうことを目標に取り組んだ。
→本の紹介を、出身小学校に届ける単元を計画している。

・書きっぱなしにしないこと。次に書く力にしていくためのよさや改善点を共有し合う活動は大切。下級生は短文で書き直しも容易だが、上級生のように長文になった時に、推敲の指導をどのように取り組んでいるか
→大人数だと担任一人で添削していくのは大変。子ども同士での共有が有効である。視点を持たせて、ポイントを絞り、そこだけを直させるようにする。
→評価の視点を持つ。系統だった付けたい力を明確にする。

・語彙を増やす指導をどうしているか。
→小社会を視写し、要点をまとめたり、自分の考えを書かせたりするようにしている。
→辞書を引くことを習慣づける。

３、実践発表、交流

（１）「変わる　つながる　日記の力」　上田　浩稔（中村南小学校）

①自分の変化
・赤ペンは、児童が書いていてきたものを、丸ごと受け止める。肯定的な赤ペンを入れること。結果、子ども達が関わりを持つきっかけにもなっていったこと。

②日記の出し方
・4 つのグループに分け、平日に出すようにした。日常の生活が書けるようになり、自分の考えが素直に表れるようになってきた。

③子どもの変化
・日記を紹介することで、子どもたち同士の関わりが増え、子どもの自信となり、積極的な行動につながった。

今の子ども達には、日記が必要。書くことを中心にして、関わり合う授業と、あたたかい学級づくりをしていく。児童が書いてきたものを楽しんで読む。減点評価ではなく、良いものを紹介して、みんなが力をつけていく。子ども発信にして、子どもを乗せていき、ゴールに向けさせていくような取り組みにしていくこと。

（２）「児童詩の見方、書かせ方」　　大西　由香（東中筋小）

①「つくしの歌」私の教師としての原点
・子どもから学ぶということ（はかり知れない可能性を持っている）
・子どもの感性や発想の素敵なこと。
・子どもの言葉に耳を傾け、受け取めること。

②何のために書かせるか。
・子どもと子ども、子どもと教師をつなぎ、認め合い、豊かな関係を育んでいくために。
・何でも話せる、何でも書ける子どもの姿、学級づくりは、児童詩教育の出発点であり、到達点。

③児童詩とは（児童詩の見方）
④どう書くか。
⑤具体的な指導について

（３）「生徒の作文から」　川上　悠麿　(中村西中)

・素直な思いを、自分の言葉で書けている作品がある。
・1 文が長いのではないか。短い文で書き、接続詞を工夫する。
・段落がないものがある。構成指導(この順序、論理の展開でいいかどうか)が必要ではないか。

・付箋の活用は便利である。書く内容を整理して，順序を変えたり、位置を移動させたりすることもできる。
・表現方法を、モデル作品を参考にして書かせてみてはどうか。

４、研修を通して
・系統性を意識して授業を計画していきたいこと。授業の中の振り返りで、肯定的評価をしていきたいこと。つけたい力を明確にして、良いモデルを示すことなど、これから生かしていきたい。
・「書く力をつけること」と、「学級経営のための書く」の二つの「書く」を学ばさせてもらった。書くことに抵抗のある子どももいる。まずは書く楽しさを知らせたい。書かせる目的をはっきりさせることが大切だと思った。書く習慣化をさせていきたい。
・心を育てる作文指導と学習していく国語を両輪で進めていくことの大切さを理解することができた。どうかみ合っていくかわからない部分があったが、両方で補っていけたらよいと思った。書くことであたたかい居場所づくりをしていきたいと思った。
・個性的であること個性を豊かに表現できる子どもに育てたいと思った。自分の成長が見えるということが大切で、工夫していきたいと思った。

2　学習会・校正作業

(学習会より)
・素直にのびのびと表現された昨品が多かった。
・題材も、前に向かっていく力であったり、優しさやあたたかい関りであったりと、作者にとっても読んでいてもうれしくなる作品が多かった。
・反面、概念的、散文的な作品も見られ、感動を切り取る指導が必要である。
・高学年になると、行事を通しての頑張りや成長を題材にした作品が多くなる。
・中学生は、将来の夢につながる作品もあり、題材の広がりが感じられる。応募数が少なかったことが残念であった。中学生になると表現しなくなる課題がある。
・先ずは、書きたい気持ちが大事にされなくてはならないが，表記の間違いが多かった（特にひらがなの長音。(　)の使用)。今年は、１行の長い作品が多く、表現方法である詩のリズムに馴染ませたい。

４、今年度の成果と課題

（成果）
・書く力をつけるための単元の見通しが持つことができ、今後の実践に活かしていける研修であった。
・心を育てる作文教育と、力をつけるための国語の学習を整理することができ、両輪で取り組み、補っていく方向性を明確にすることができた。
・作文教育の大切さを改めて確認することができ、実践への意欲につなげることができた。
・児童生徒の作品を読みあうことで、指導方法や課題、改善策等について学び合えたことはよかった。

（課題）
・「四万十の子」に応募する学校が限られている。参加校や応募数を増やしたい。そして、子どもの活躍の場である機会を活用してもらいたい。
・本会の活動を紹介し合って、「書くこと」の指導について学習したいという仲間を増やしていきたい。